

第1章

子どもの生活

第1節 * 幼児期から小1生の生活

松本留奈

小1生になると、早起きの傾向が強まり、平日に学校外で一緒に遊ぶ友だちの数が増えるといった生活の変化がみられる。メディアへの接触時間は、幼児期と小1生とでは変わらない。

幼児期から小学校入学期の子どもたちの基本的な生活は、どのようなものだろうか。

就園や就学は、子どもの生活時間にとって大きな影響があると考えられる。よって、本節では、幼児期から小学校入学にかけては学年の違いに、また、幼児期においては就園状況の違いに注目しながら、基本的な生活に関するデータをみていきたい。

1. 小1生になると、早寝早起きになる傾向

はじめに、起床時刻をみてみよう(図1-1-1)。「6時半頃」以前に起床する割合は、年少児22.7%、年中児24.4%、年長児28.0%、小1生60.1%である。起床時刻は、幼児期の間は、学年があがるにつれ少しずつ、そして小学校入学を機に大幅に早くなる傾向がみられた。

次に、就寝時刻をみてみよう(図1-1-2)。「21時半頃」以前に就寝する割合は、年少児75.7%、年中児78.7%、年長児78.5%、小1生82.0%である。就寝時刻は、幼児期においては、学年での変化はみられないものの、小1生になると少し早くなる傾向

がみられた。

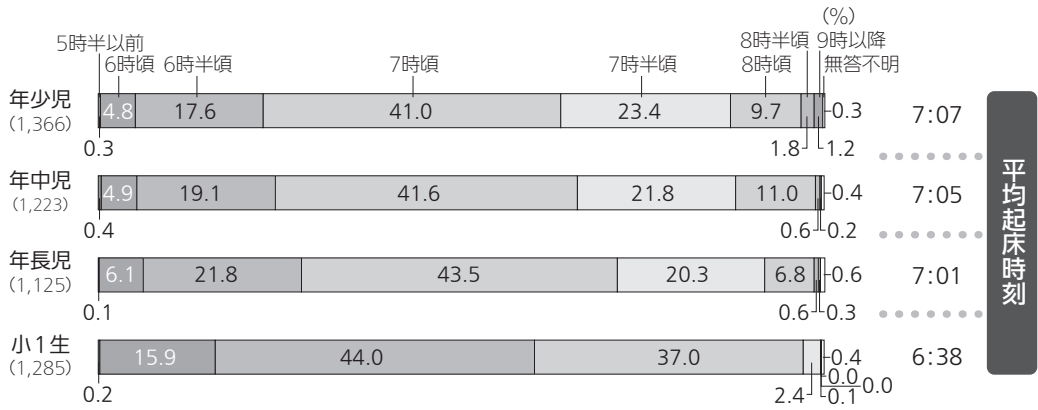
このことから、小学校入学を機に、子どもの起床時刻は大幅に早まり、それともなつて就寝時刻も少し早まる傾向が明らかとなった。背景には、園の開始時刻と小学校の始業時刻の違いの影響が考えられるだろう。

2. 小1生の夜間平均睡眠時間は、幼稚園児と比べると短い、保育園児とはほとんど変わらない

子どもの就園状況・学年別に、平均起床時刻と平均就寝時刻、さらに夜間平均睡眠時間をみてみよう(表1-1-1)。

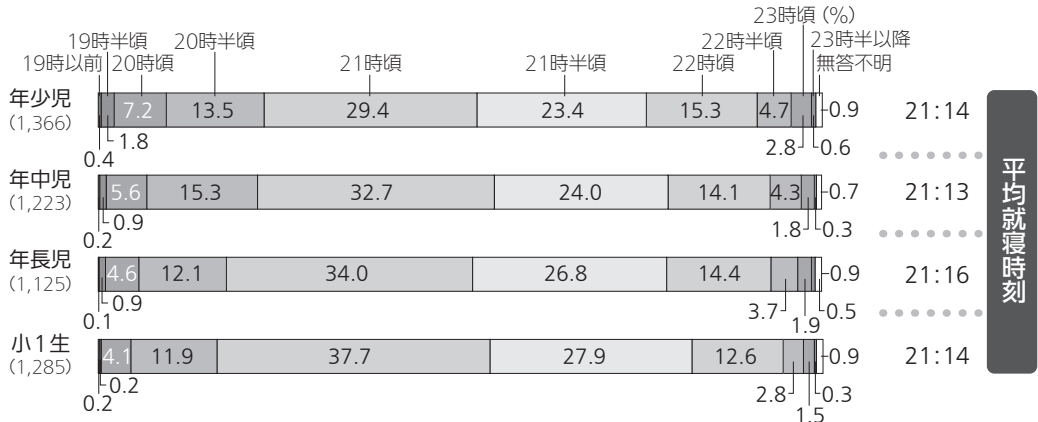
まず、幼児期における平均起床時刻、平均就寝時刻、夜間平均睡眠時間は、就園状況による差が大きいことがわかる。平均起床時刻、平均就寝時刻をみると、どの学年においても、保育園児は、幼稚園児より約10分程度早く起床し、約20~30分程度遅く就寝することが明らかとなった。その結果、夜間平均睡眠時間は、約30~40分程度幼稚園児より保育園児のほうが短くなっている(別調査ではあるが、保育園児は幼

図1-1-1 平日の起床時刻（学年別）



注1) 平均起床時刻は、「5時半以前」を「5時半」、「6時半頃」を「6時」、「9時以降」を「9時」のように置き換えて換算した。無答不明の人は分析から除外。
 注2) () 内はサンプル数。

図1-1-2 平日の就寝時刻（学年別）



注1) 平均就寝時刻は、「19時以前」を「19時」、「19時半頃」を「19時半」、「23時半以降」を「23時半」のように置き換えて換算した。無答不明の人は分析から除外。
 注2) () 内はサンプル数。

表1-1-1 平均起床・就寝時刻（年少児～年長児・就園状況別・学年別）

		平均起床時刻	平均就寝時刻	夜間平均睡眠時間
幼稚園児	年少児 (711)	7:07	21:00	10時間7分
	年中児 (808)	7:09	21:05	10時間4分
	年長児 (695)	7:03	21:08	9時間55分
保育園児	年少児 (454)	6:56	21:32	9時間24分
	年中児 (392)	6:56	21:31	9時間25分
	年長児 (400)	6:56	21:29	9時間27分
小1生 (1,279)		6:38	21:14	9時間24分

注1) 保育園児で“年少児、は3歳児クラス、“年中児、は4歳児クラス、“年長児、は5歳児クラスを表す。
 注2) 平均起床時刻と平均就寝時刻は「8時半頃」を「8時」、「9時以降」を「9時」のように置き換えて換算した。無答不明の人は分析から除外。
 注3) 平均夜間睡眠時間は、平均起床時刻と平均就寝時刻から算出した。
 注4) () 内はサンプル数。

幼稚園より平均昼寝時間が長いため、平均合計睡眠時間は就園状況による差がないとの結果が明らかとなっている。）

次に、小1生になると、平均起床時刻は6:38、平均就寝時刻は21:14となる。幼稚園年長児と比べると、平均起床時刻は25分早く、平均就寝時刻は6分遅くなる。その結果、夜間平均睡眠時間は、早起きの傾向が強まる影響を受け、31分短くなる。また、保育園年長児と比べると、平均起床時刻は18分、平均就寝時刻は15分、どちらも前倒しになっており、早寝早起きになる傾向がみられる。その結果、夜間平均睡眠時間は、ほとんど変わらないことが明らかになった。

3. 小1生になると、平日一緒に遊ぶ友だちが増える

ここからは、子どもの遊びについてみてみよう。

子どもが、平日一緒に遊ぶ友だちの数を聞いた結果が、図1-1-3である。どの学年においても「遊んでいない」を除くと、「2～3人」と回答した割合がもっとも多く、年少児24.0%、年中児29.2%、年長児32.8%、小1生50.0%である。

一方、「遊んでいない」と回答した割合は、年少児44.8%、年中児36.2%、年長児35.0%、小1生8.9%である。年少児から年中児にかけて8.6ポイント、年長児から小1生にかけて26.1ポイントも減少する。とくに、年長児から小1生にかけての減少が大きく、小1生になると、平日に友だちと一緒に遊ぶ割合が増えることがわかる。

次に、幼児期の子どもの就園状況別・学年別に平日一緒に遊ぶ友だちの数をみてみよう（図1-1-4）。幼稚園児では、どの学年においても「2～3人」と回答した割合が

もっとも多く、年少児28.5%、年中児34.9%、年長児41.4%と学年があがるにつれ増加する傾向である。

一方、保育園児では、どの学年においても「遊んでいない」と回答した割合がもっとも多く、年少児65.4%、年中児57.5%、年長児57.4%で、どの学年でも6割前後にのぼる。在園時間が長い保育園児（p.79 図5-2-2参照）は、平日、園以外の場所で友だちと遊ぶ機会は少ないのだろうと推察される。

4. 平日に友だちと遊ぶ幼児のうち、約6割が1～2時間くらいと回答

次に、幼児が平日に友だちと遊ぶ時間を聞いた結果が、図1-1-5である。「1時間くらい+2時間くらい」と回答した割合が、年少児55.9%、年中児58.9%、年長児63.8%で、どの学年においても、約6割前後となっており、1～2時間程度が、幼児において、もっとも一般的な友だちとの遊び時間であるようだ。

また、子どもの就園状況別に、平日に友だちと遊ぶ平均時間をみてみよう（表1-1-2）。友だちと遊ぶことがある幼児のみを分析対象としているが、幼稚園児が1時間21分、保育園児が1時間7分と、幼稚園児のほうが長い。保育園児は、園以外の場で友だちと遊ぶ機会が少ないうえ、遊ぶ場合でも、幼児園児と比べると、時間が短いことがわかった。

小1生に、平日放課後、体を動かして遊ぶ時間を聞いた結果が、図1-1-6である。小1生の93.0%（「0分+無答不明」を除いた結果）が、平日放課後、体を動かして遊んでいることがわかった。時間は「1時間くらい」がもっとも多く、38.6%である。

図1-1-3 平日一緒に遊ぶ友だちの数（学年別）

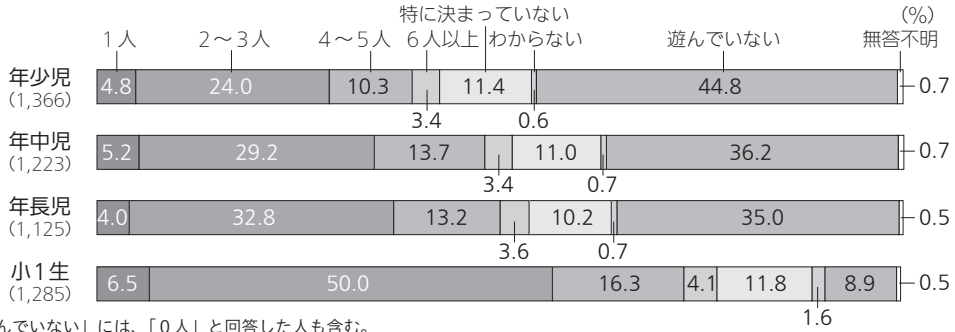


図1-1-4 幼児が平日一緒に遊ぶ友だちの数（年少児～年長児・就園状況別・学年別）

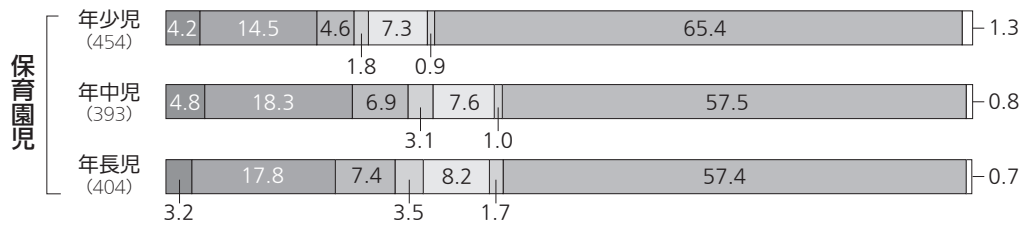
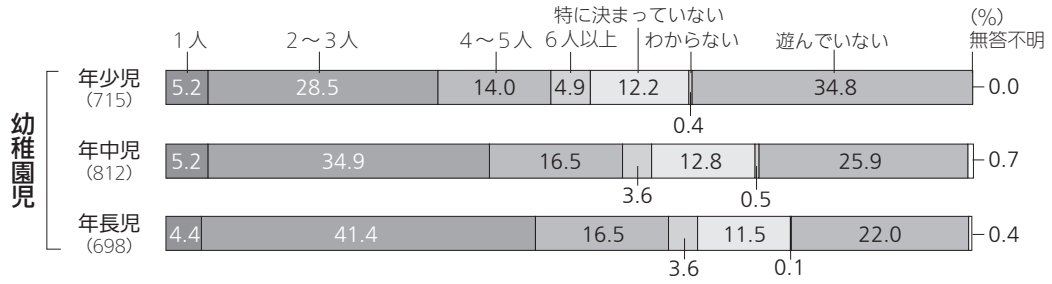


図1-1-5 幼児が平日友だちと遊ぶ時間（年少児～年長児・学年別）

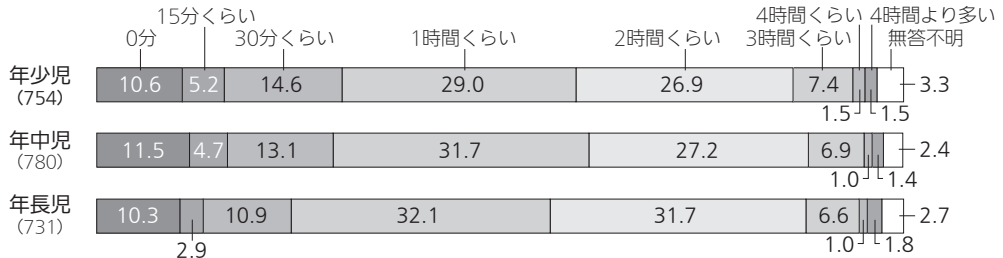
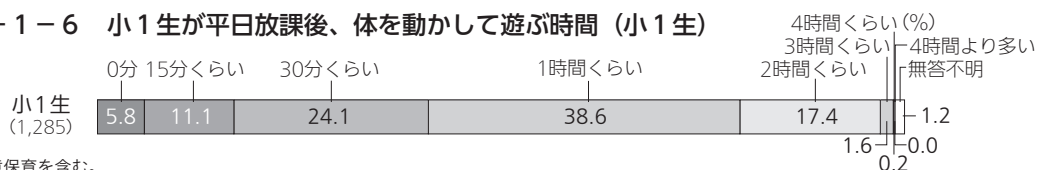


表1-1-2 幼児が平日友だちと遊ぶ平均時間（年少児～年長児・就園状況別）

幼稚園児 (1,577)	1時間21分
保育園児 (479)	1時間7分

注) 平均時間は、「30分くらい」を「30分」、「1時間くらい」を「60分」、「4時間より長い」を「300分」のように置き換えて算出した。平日、一緒に遊ぶ友だちが「0人」、「遊んでいない」と回答した人、無答不明の人は除外。

図1-1-6 小1生が平日放課後、体を動かして遊ぶ時間（小1生）



5. 小1生になると、平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVD視聴時間は減少する傾向

ここからは、子どものメディアの利用についてみてみよう。

はじめに、子どもの平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVD視聴時間をみてみよう（図1-1-7）。これによると、比較的視聴時間が短いとみなされる「0分+30分くらい+1時間くらい」と回答した割合は、年少児33.4%、年中児30.1%、年長児31.0%、小1生43.3%である。平均時間をみると、幼児期はどの学年においても、1時間50分程度であるのに対し、小1生では1時間36分である。このことから、小1生になると平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVDの視聴時間が短くなる傾向が明らかになった。

次に、幼児期の子どもの就園状況別に、平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVDの平均視聴時間をみてみよう（表1-1-3）。幼稚園児では1時間57分、保育園児では1時間45分で、12分の差となった。本調査ではたずねていないが、一般的な幼稚園児と保育園児の在園時間の差や帰宅時間の差を考慮すると、テレビ・ビデオ・DVDの平均視聴時間に対する就園状況の影響は、さほど大きくなかったといえるだろう。

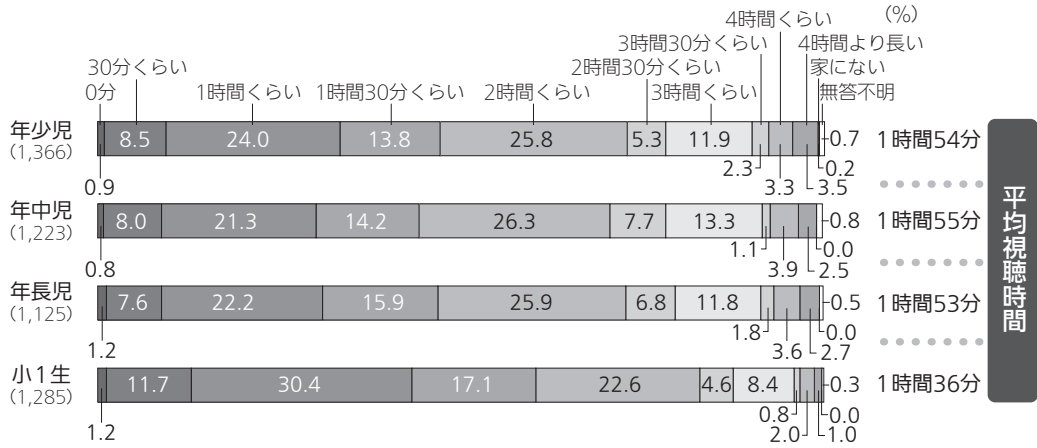
6. 年少児から小1生にかけて、学年があがるにつれ平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの利用時間は増加する傾向

次に、平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの利用時間をみてみよう（図1-1-8）。「0分」と回答した割合は、年少児55.1%、年中児44.8%、年長児37.6%、小1生31.4%である。平均時間をみると、年少児17分、年中児25分、年長児30分、小1生32分である。このことから、学年があがるにつれ、平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの利用時間は増加することがわかる。

次に、幼児期の子どもの就園状況別に、平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの平均利用時間をみてみよう（表1-1-4）。幼稚園児では25分、保育園児では20分で、5分の差となった。テレビ・ビデオ・DVDの平均視聴時間同様、テレビゲーム・携帯ゲームの平均利用時間に対する就園状況の影響も、さほど大きくないといえるだろう。

以上から、小1生になると、テレビ・ビデオ・DVDの視聴時間は短くなるが、その分、テレビゲーム・携帯ゲームの平均利用時間は長くなる傾向にあるため、幼児期から小1生までを通して、総合的なメディアの接触時間には、さほど大きな変化はみられないことがわかった。

図1-1-7 平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVD視聴時間（学年別）



注) () 内はサンプル数。

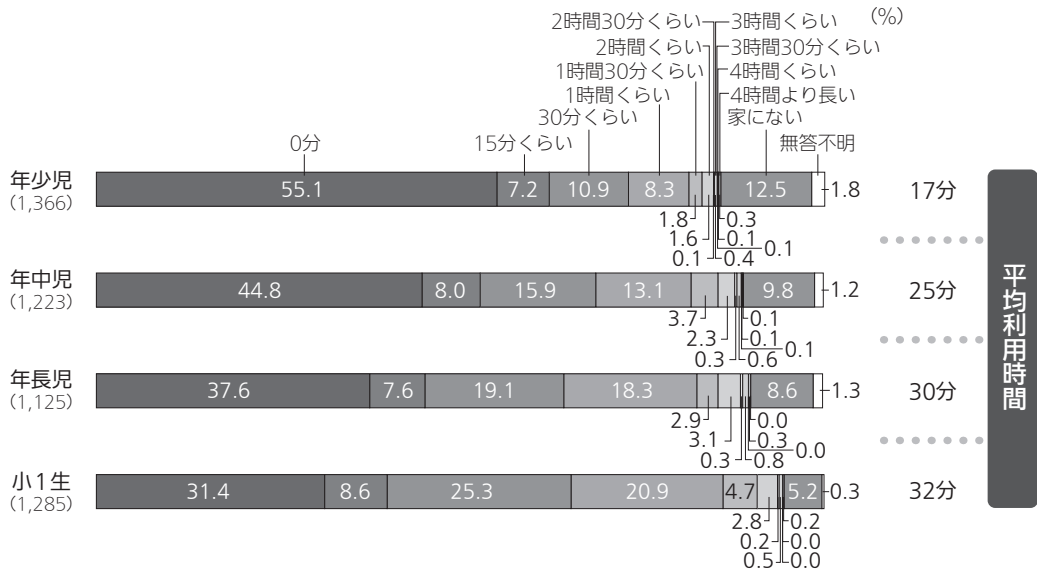
表1-1-3 幼児の平日1日あたりのテレビ・ビデオ・DVD平均視聴時間（年少児～年長児・就園状況別）

幼稚園児 (2,213)	保育園児 (1,246)
1時間57分	1時間45分

注1) 平均時間は、「30分くらい」を「30分」、「1時間くらい」を「60分」、「4時間より長い」を「300分」のように置き換えて算出した。「家がない」、無答不明の人は分析から除外。

注2) () 内はサンプル数。

図1-1-8 平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの利用時間（学年別）



注1) 平均時間は、「30分くらい」を「30分」、「1時間くらい」を「60分」、「4時間より長い」を「300分」のように置き換えて算出した。「家がない」、無答不明の人は分析から除外。

注2) () 内はサンプル数。

表1-1-4 幼児の平日1日あたりのテレビゲーム・携帯ゲームの平均利用時間（年少児～年長児・就園状況別）

幼稚園児 (1,963)	保育園児 (1,106)
25分	20分

注1) 平均時間は、「30分くらい」を「30分」、「1時間くらい」を「60分」、「4時間より長い」を「300分」のように置き換えて算出した。「家がない」、無答不明の人は分析から除外。

注2) () 内はサンプル数。

第2節 ＊ 習い事と教育費

松本留奈



習い事をしている割合は、子どもの学年があがるにつれ上昇し、家庭から支出する教育費も増加する。一方で、家庭以外から援助される教育費の額は変わらない傾向にある。

幼児期から小1生にかけての習い事、また、それにかかる教育費のねん出についてみていきたい。

1. 小1生になると、8割以上の子どもがなんらかの習い事をしている

はじめに、「お子さまは現在、習い事・おけいこ事をしてしていますか」という問いに対して、「はい」と回答した割合をみると（図1-2-1）、年少児45.8%、年中児66.6%、年長児76.0%、小1生85.3%である。学年があがるにつれ、習い事をしている割合は増加し、小1生になると、8割以上の子どもがなんらかの習い事をしていることが明らかとなった。とくに、年少児から年中児にかけて20.8ポイント、年長児から小1生にかけて9.3ポイントと増加がみられることから、年中児から習い事を始める子どもが多いことがわかる。

次に、幼児期の子どもの就園状況別に、習い事をしている割合をみてみよう（表1-2-1）。幼稚園児、保育園児ともに学年があがるにつれ、習い事をしている割合は増加する。さらに、どの学年においても、保育園児より幼稚園児のほうが習い事をしている割合は高く、年長児になると幼稚園児83.0%、保育園児64.6%となり、18.4ポイントの差がある。

保育園児は、在園時間が長い傾向にあるため（p.79 図5-2-2 参照）、幼稚園児と比

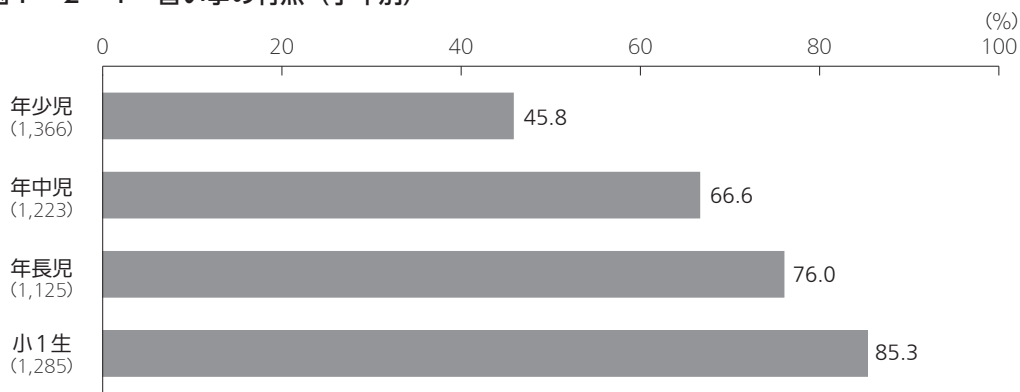
べると、習い事にあてる時間が少ないと推察される。

2. いずれの学年においても、「定期的に教材が届く通信教育」、「スイミングスクール」が、習い事の上位2つにあがる

次に、子どもの学年別に、習い事の種類をみてみよう（表1-2-2）。どの学年においても、上位5つにあがる習い事は、「定期的に教材が届く通信教育」、「スイミングスクール」、「楽器」、「英会話などの語学教室や個人レッスン」、「スポーツクラブ・体操教室」である。とくに、いずれの学年においても上位2つにあがる「定期的に教材が届く通信教育」、「スイミングスクール」は、どちらも小1生で習っている割合が約4割で、この時期の子どもの代表的な習い事といえるだろう。

また、いずれも割合としては少ないが、年長児から小1生にかけて、「習字」が7.1ポイント、「そろばん」が6.2ポイント増加しており、小学校の学習を意識した習い事を始める様子が見えてくる。さらに、「スポーツクラブ・体操教室」が5.1ポイント減少する一方で、「地域のスポーツチーム（野球やサッカーなど）」が7.5ポイント増加していた。運動系の習い事として、幼児期は、親子向けや幼児向けの基礎体力作りを重視したスポーツクラブや体操教室に通い、小1生になると、地域のスポーツチームに所属する傾向があるのではないと思われる。

図1-2-1 習い事の有無（学年別）



注1) 習い事を「している」の%。
注2) ()内はサンプル数。

表1-2-1 幼児の習い事の有無（年少児～年長児・就園状況別・学年別） (%)

	年少児	年中児	年長児
幼稚園児	49.7 (715)	72.4 (812)	83.0 (698)
保育園児	38.3 (454)	54.5 (393)	64.6 (404)

注1) 習い事を「している」の%。
注2) ()内はサンプル数。

表1-2-2 習い事の種類（学年別） (%)

	年少児 (1,366)		年中児 (1,223)		年長児 (1,125)		小1生 (1,285)				
定期的に教材が届く通信教育	17.6	①	22.2	②	26.4	②	<<	39.0	①		
スイミングスクール	14.1	②	<<	25.4	①	<	31.3	①	<	37.6	②
楽器（ピアノやバイオリンなどの個人レッスン）	4.4	⑤	<	11.0	⑤	<	16.9	④		17.8	③
英会話などの語学教室や個人レッスン	9.6	③		12.3	④		16.4	⑤		15.6	④
スポーツクラブ・体操教室	8.5	④	<<	18.7	③		20.6	③	>	15.5	⑤
習字	0.5			2.1			6.5		<	13.6	
地域のスポーツチーム（野球やサッカーなど）	1.2			2.8			5.8		<	13.3	
計算・書きとりなどのプリント教材教室	2.1			4.5			8.2			9.8	
その他	2.7			4.6			9.0			8.5	
そろばん	0.3			0.4			1.3		<	7.5	
音楽教室	4.1			7.4			7.4			6.1	
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	1.8			1.5			2.4			4.2	
バレエ・リトミック	4.0			3.9			4.2			3.5	
お絵かきや造形教室	1.1			2.2			3.4			1.7	
受験が目的ではない教室やプレイルーム	2.5			1.7			1.8			1.5	
一度に購入する教材・教育セット	2.0			1.8			2.0			1.4	
受験のための塾・家庭教師	0.4			0.8			0.1			0.8	

注1) 複数回答。
注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた全員の回答を母数としている。
注3) 小1生の降順に図示。
注4) <> 5ポイント以上、<<>>は10ポイント以上差があるもの。
注5) ①～⑤は各学年ごとの順位。
注6) ()内はサンプル数。

3. 1つ学年があがるにつれ、家計から支出する1か月あたりの教育費は約2,000円増加する傾向

ここからは、1か月にかける教育費についてみてみよう。

はじめに、子どもの学年別に1か月あたりに家計から支出する教育費をみてみよう(図1-2-2)。「2,500円未満」と回答した割合が、年少児46.8%、年中児29.6%、年長児20.3%、小1生8.7%と学年があがるにつれ減少する。このことから、学年があがるにつれ、教育費が増加する傾向がわかる。また1か月あたりに家計から支出する教育費の平均をみると、年少児5,334円、年中児7,419円、年長児9,427円、小1生11,262円であり、1つ学年があがるごとに、1か月あたり約2,000円上昇することが明らかとなった。

次に、子どもの学年別に1か月あたりに家計以外(祖父母からの援助)から支出する教育費をみてみよう(図1-2-3)。「2,500円未満」と回答した割合は、年少児83.7%、年中児82.7%、年長児82.2%、小1生79.1%と、学年によってほとんど変化はみられない。また、1か月あたりに家計以外(祖父母からの援助)から支出する教育費の平均費用は、どの学年においても、2,000円前後にとどまった。

このことから、幼児期から小1生にかけて、教育費は増加する傾向にあるものの、家計以外(祖父母からの援助)からの支出額は変わらない。つまり、負担が増加する分に関しては、家計からねん出しているであろう現状が明らかとなった。

4. 世帯年収があがるにつれ、教育費をかける家庭は増加する

世帯年収と教育費の関係はどうなっているだろうか。世帯年収別に1か月あたりに家計から支出する教育費をみたものが、図1-2-4である。もっとも低い「2,500円未満」と回答した割合は、世帯年収「400万円未満」49.7%、「400万～600万円未満」35.9%、「600万～800万円未満」27.5%、「800万～1,000万円未満」22.0%、「1,000万円以上」16.8%と世帯年収があがるにつれ、減少する。

一方で、どの世帯年収の層においても、教育費について「2,500円～5,000円未満」、「5,000円～7,500円未満」、「7,500円～10,000円未満」、「10,000円～15,000円未満」と回答した割合は、それぞれ約1～2割程度で分布していることから、「2,500円未満」に抑える場合には世帯年収の影響があるものの、一定の教育費をかける場合には、世帯年収の影響は大きくないことがうかがえる。

次に、世帯年収別に1か月あたりに家計以外(祖父母からの援助)から支出する教育費をみてみよう(図1-2-5)。もっとも低い「2,500円未満」と回答した割合は、世帯年収「400万円未満」77.7%、「400万～600万円未満」81.7%、「600万～800万円未満」85.4%、「800万～1,000万円未満」87.3%、「1,000万円以上」87.8%と、世帯年収があがるにつれ増加する。このことから、世帯年収が低い層ほど、家計以外(祖父母からの援助)からの支出が多い傾向がわかる。しかし、平均費用をみると2,000円台にとどまっており、さほど大きい援助ではないことが明らかとなった。

図1-2-2 1か月あたりに家計から支出する教育費（学年別）

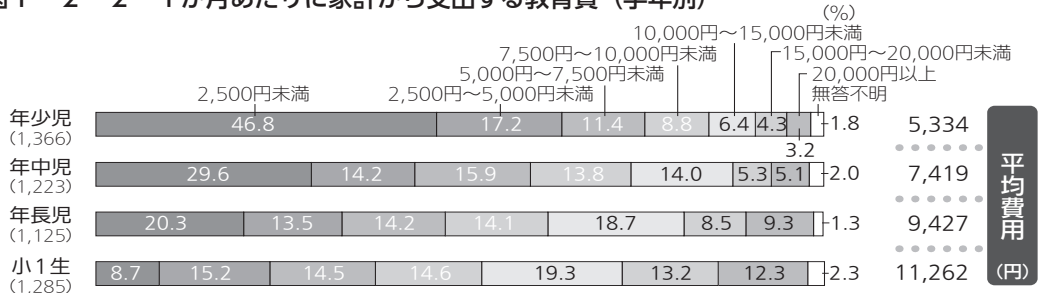


図1-2-3 1か月あたりに家計以外（祖父母からの援助）から支出する教育費（学年別）

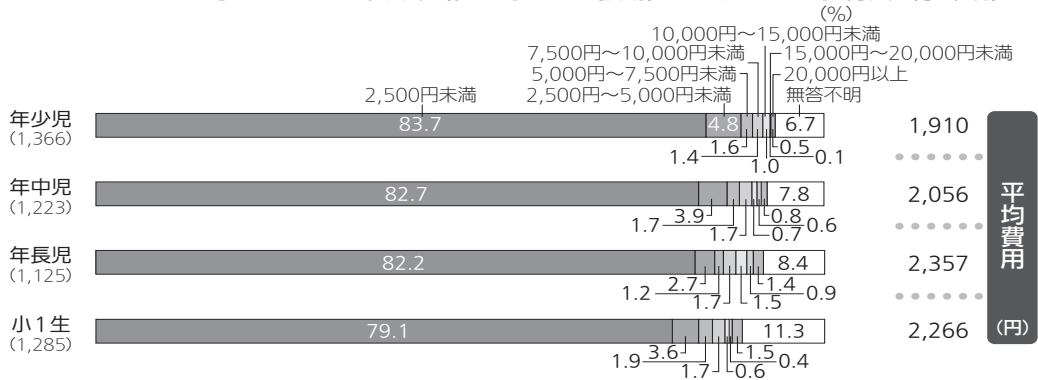


図1-2-4 1か月あたりに家計から支出する教育費（年少児～年長児・世帯年収別）

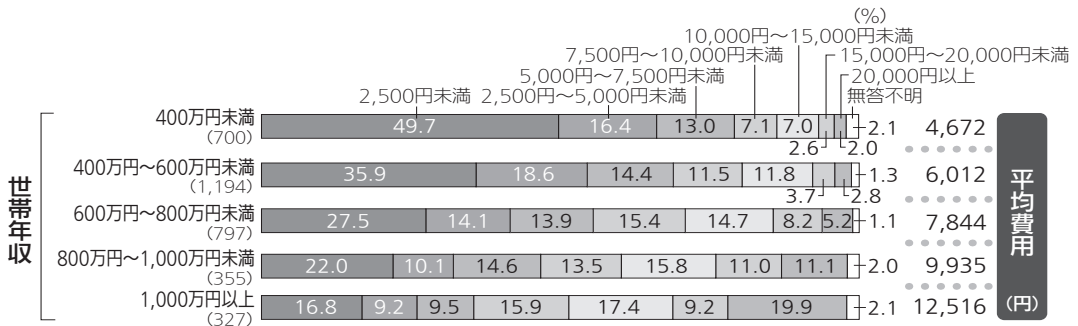


図1-2-5 1か月あたりに家計以外（祖父母からの援助）から支出する教育費（年少児～年長児・世帯年収別）

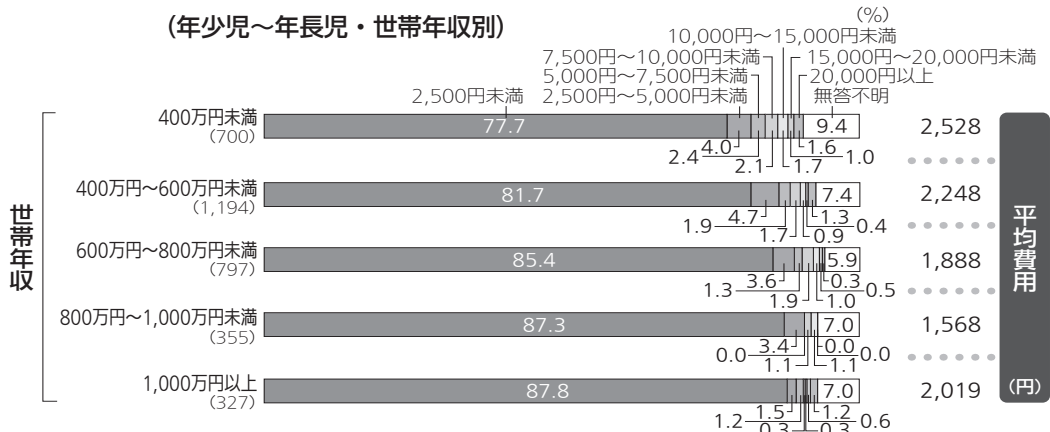


図1-2-2～5について

注1) 習い事・おけいこ事・通信教育・塾・絵本・玩具などの費用を含む。幼稚園や保育園の保育料は含まない。

注2) 平均費用は、「2,500円未満」を「1,250円」、「2,500～5,000円未満」を「3,750円」、「5,000～7,500円未満」を「6,250円」、「40,000円以上」を「42,500円」のように置き換えて、算出した。無答不明の人は分析から除外。